[別紙 2]

審 査　結 果 の 要 旨

氏名　　大島　浩子

本研究は、左半側空間無視 (Unilateral Spatial Neglect;Neglect) を有する右大脳半球損傷脳卒中患者の入院中の急性期から退院後の慢性期の機能、日常生活行動(ADL)能力、障害受容に悪影響をおよぼすとされてきた日常生活における Neglect 行動とその認識について、Catherine Bergego Scale 日本語版 (CBS) を作成しその妥当性を検証し、CBS を用いた生活障害の変化の特徴を明らかにすると共に、CBS の活用可能性を検討したもので、以下の結果を得ている。

1. CBS を作成し、The National Institutes of Health Stroke Scale(NIHSS)、Barthel Index(BI)、Mini-Mental State Examination(MMSE)、線分二等分・線分抹消検査との関連を検討した。CBS と他の評価尺度に各々強い関連があることを明らかにし。本邦における CBS は、原版で報告されている各々の相関係数との比較から、原版に相当する妥当な尺度であることを示した。
2. CBS 3 得点、即ち、CBS-観察得点、CBS-自己評価得点、CBS-Anosognosia 得点を用いた評価を行った。入院時に Neglect を有する患者は少なくとも退院後 3 ヶ月までは、日常生活における中程度の Neglect 行動を有し、同時点で他者から観察された Neglect 行動を、患者自身は軽い困難と認識し、中等度から軽度の Anosognosia を有する、という患者の自然経過を明らかにした。CBS3 得点の経時変化の検討から、退院時の CBS-観察得点、CBS-Anosognosia 得点と退院後の得点に強い関連がみとめられたことから、CBS 3 得点を用いることで、患者の経過・予後を推測しうることを示した。患者の病識、即ち CBS-Anosognosia 得点の程度と Neglect 行動の改善度については、明瞭な傾向を明らかにすることができなかった。

CBS は机上 Neglect 検査では評価できない患者の ADL 面と視空間・半側注意障害に関する Neglect 行動と、患者自身が認識している日々の困難感、Anosognosia を評価し得る有用な尺度であることが示された。

CBS と他の尺度との関連から、Neglect を有する脳卒中患者は、脳卒中の程度が重く、ADL 能力回復が不良であることを示した。

3. CBS 得点の経時変化と他の尺度との関連から、入院時より退院時以降に強い関連が示された。入院時の急性期には「ぶつかる」、「方向性注意」を観察できない可能性が限界として示された。CBS の急性期使用には、できない ADL、「ぶつかる」、「空間見当識」を除いた簡易版ないし修正版 CBS の作成など CBS 簡易版・修正版を作成し使用することの必要性が示された。

CBS を急性期に応用する場合は、総得点の変化のみに着目するのではなく、継続的に観察することで下位項目の変化に注意をむけることが示された。これにより、入院中から退院後の生活障害の出現を見通すことが可能となり、Neglect を有する脳卒中患者の生活障害の評価と看護ケアの提供の方向性を検討する一助となることが期待される。

以上、本論文は、Neglect 行動とその認識を測定する Catherine Bergego Scale 日本語版(CBS)を作成し、それを用いて Neglect を有す患者の生活障害の特徴を明らかにしたところが独創的である。また、CBS は机上 Neglect 検査では評価できない患者の ADL、Neglect 行動、日々の困難感、Anosognosia を評価し得るという点で有用性もあり、学位の授与に値するものと考えられる。